

もう少し、もっともっと・・・

服部 哇作

005-0002 札幌市南区真駒内柏丘7丁目6番26号、元日本白鳥の会事務局長

松井先生とは、いつ、どこで、どんな機会に、はじめてお目にかかり、お付き合い頂けるようになったのか？二昔以上も前の事ゆえ記憶が定かではないが、多分、昭和40年に札幌市内三菱ビルのロビーで開催された、第1回北海道野生動物写真研究会の会場ではなかったかと思われる。当時、私は北海道立衛生研究所に所属しており、写真には大変興味を持っていた。加えて子供の頃から内田清之助、中西悟堂、仁部富之助氏らによる野鳥の生態観察に関する書籍などを読み漁ったりもしていた。中でも最も私を魅了していたのは、下村兼史氏による鳥類生態写真集であった。超望遠レンズを駆使した撮影された作品の数々は、当時の私にとっては手の届かぬ世界を現実にも目の前に示してくれたような魅力溢れる著作であった。下村氏は他に文化映画「或る日の干潟」も製作、発表され、それを映画館で見た時の感動は今でも忘れられない。この映画は画期的なものとして評判になり、今日の野生動物映像の魁をもなった名作ともいわれている。

そんな下地のあった私の目に、第1回北海道野生動物写真研究会開催のニュースが飛びこんできた。会場に足を一步踏み入れると、そこには望遠レンズを駆使した鳥獣の写真がズラリと並んでおり、私が書籍の中で堪能した、夢に画いていた数々の写真が現実のものとして目の前に並べられていたのである。松井先生のハクチョウをはじめとして、竹田津氏のキタキツネ、林田恒夫氏のタンチョウ、林大作氏のヤマセミ等々の作品も展示されていたように思う。その他何れの作品もレベルの高い力作ぞろいであった。これぞ私の永年の願いを満たしてくれる集い、と早速その場で入会させて頂いた次第である。そして昭和41年秋の第2回写真展には私自身の作品も展示することができた。この写真展は毎年のように何年も続いたので、会長格でもあった松井先生とは、爾来この会を通じて長いお付き合いを頂けるようになったのである。

そんな中、たしか昭和60年頃のことであったように記憶しているが、松井先生から連絡があり、今度「日本白鳥の会」の会長を引き受けることになった。ついては事務局もこちらに移るので、事務局長を引き受けてくれないかとのお話しであった。私自身その任に堪えられる能力があるとは思えなかったのでご辞退申し上げたが、是非にということでお引き受けする羽目になってしまった。細かい事務的な処理は松井先生の病院におられた芳賀孝行氏がすべてきちんと整理してくださったので、会の運営は万事遺漏なく進めることができた。

松井先生は会長職につかれて以来、精力的に白鳥の会の運営、発展に努力された。そのご努力の様子は事務局長として傍らにいたことが多かった私には手に取るように理解できた。そしてこのことは私の人生修行にとって大きなプラスを齎したのであ

る。“ハクチョウの松井”と言われたとおり、ことハクチョウに関わることについては、常に新しい企画を考え出されていたが、それらの企画は日本国内はいうに及ばず、諸外国にまで及ぶものも含まれていた。そのためには何度か打ち合わせのための会合を開く訳だが、その際末席にいた私が驚かされたのは、打ち合わせ会に集まる顔ぶれが実に多士済々であったことである。それぞれの企画に応じて集められた人材は、何れもその道の専門家といえる人々であって、そういう人々がいとも気楽に呼びかけに応じて会合に参加されたのは、偏に飾らない先生のお人柄と、問題取り組みへの真摯な熱意を誰もが感じたからであろう。

省みれば、松井先生とお付き合いした期間が長かったのか、短かったのか、深かったのか、浅かったのか、今の私の脳裏には思い出ばかりがぎっしりと詰まっており、混沌として整理もつきかねる状況である。何はともあれ、もう少し、もっともっとお付き合いさせて頂きたかったと思う気持ちで一杯である。

合掌